

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2017/11/01

ドル高アノマリーは健在か？

通貨ペア	基調		ページ数
ドル/円	➔	月初にイベント集中 予想レンジ: 112.000~116.000円	2-3
カナダ/円	➔	BOCの姿勢転換 予想レンジ: 83.600~90.400円	4-5

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



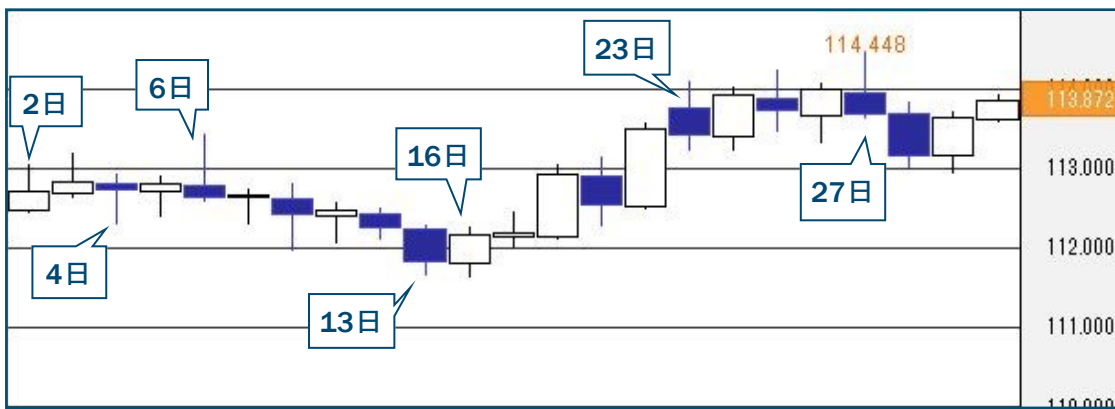
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2017Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

USD/JPY

ドル/円 10月の推移

10月のドル/円相場は111.651～114.448円のレンジで推移し、月間の終値ベースでは約1.0%の上昇(ドル高・円安)となった。6日の米9月雇用統計で平均時給の伸び率が予想を大きく上回ったものの、13日に発表された米9月消費者物価指数ではインフレ圧力が依然として高まっていない事が示された。こうした中、中旬には一時111.60円台へ下落したが、世界的に株価が堅調な「リスクオン」の地合いの中で下値は堅かった。その後は、米連邦準備制度理事会(FRB)の次期議長候補のひとり、タカ派と目されるテイラー・スタンフォード大教授が浮上した事や、本邦衆院選(22日投開票)における自民・公明の圧勝によって金融緩和を柱とする「アベノミクス」が当面継続されるとの見方が広がった事から、流れはドル高・円安に傾いた。米議会が2018年度予算決議案を可決した事でトランプ米大統領の目玉政策である税制改革への期待が再燃した事も、ドル/円の上昇を支援。下旬には114.40円台まで上昇して7月11日以来の高値を付ける場面もあった。



四本値	
OPEN	112.499
HIGH	114.448
LOW	111.651
CLOSE	113.641

2日	日銀短観は大企業製造業業況判断DIが22と、市場予想(18)を上回り、前回(17)から上昇して2007年9月以来の高水準を記録。なお、企業の想定為替レートは109.29円であった。また、米9月ISM製造業景況指数は60.8と、悪化予想(58.1)に反して前回(58.8)から上昇して2004年5月以来の高水準を記録した。ただ、いずれも相場への影響は限定的だった。
4日	次期FRB議長候補として、ハト派寄りのパウエル現理事が有力との見方などから時間外取引で米国債利回りが低下する中、ドル売りが先行。しかし、米9月ISM非製造業景況指数が59.8と、2005年8月以来の高水準を記録して市場予想(55.5)や前回(55.3)を上回った事などからドルが買い戻された。
6日	米9月雇用統計は、非農業部門雇用者数が3.3万人減と予想(8.0万人増)に反して減少した一方、失業率は4.2%に改善(予想4.4%)した。また、平均時給は前月比+0.5%、前年比+2.9%と、予想(+0.3%、+2.6%)を上回る伸びを示した。雇用者数の減少は、大型ハリケーンの影響による一時的なものとの見方が強く、失業率が2001年2月以来の水準に低下した点や、平均時給が大幅に伸びた点を重く見て、ドル買いが強まった。しかし「北朝鮮は今週末、米西海岸が射程に入るミサイル実験を行う可能性がある」とのロシア下院議員の見解が伝わると円買いが強まり、ドル/円は112円台へと反落した。
13日	米9月消費者物価指数は前月比+0.5%、前年比+2.2%といずれも予想(+0.6%、+2.3%)を小幅に下回った。また、変動の大きい食品とエネルギーを除いたコア指数も前年比+1.7%と予想(+1.8%)を下回った。これを受けて、米長期金利が低下するとドル売りが強まり、ドル/円は111.60円台まで下落した。なお、同時に発表された米9月小売売上高は前月比+1.6%と予想(+1.7%)を下回ったが、自動車を除いた売上高は前月比+1.0%と予想(+0.9%)を上回った。
16日	一部通信社が、次期FRB議長人事で、トランプ大統領がジョン・テイラー・スタンフォード大学教授に好印象を抱いたと報じた。テイラー氏が提唱する「テイラー・ルール」に基づけば、現在の米政策金利は3.00%を上回るとされる事からドル買いが活発化すると、ドル/円は112円台を回復した。
23日	前日22日に投開票が行われた本邦衆院選で与党(自民・公明)が3分の2以上の議席を獲得。安倍首相の続投が決定的となり、アベノミクスと日銀の大規模緩和も継続するとの見方から円売りが先行したが、114円台に入ると戻り売りが出た。その後、一部米紙が「北朝鮮が生物兵器を製造している疑いがある」と報じた事がきっかけとなり113.20円台まで下落した。
27日	米7-9月期国内総生産(GDP)・速報値が前期比年率+3.0%と市場予想(+2.6%)を上回る伸びを示すと、米長期金利の上昇とともにドル買いが強まり7月11日以来の高値となる114.448円まで上昇した。なお、米7-9月期個人消費・速報値も前期比年率+2.4%と、予想(+2.1%)を上回った。しかし、スペイン・カタルーニャ自治州がスペインからの独立を宣言した事や、「トランプ米大統領は、次期FRB議長にパウエル現理事を指名する方向に傾いている」とする複数の関係筋の話が伝わった事を受けて、米長期金利が低下するとドル/円は反落した。

USD/JPY

米2年債利回り

OPEN	1.4867%
HIGH	1.6314%
LOW	1.4551%
CLOSE	1.5997%

米10年債利回り

OPEN	2.3408%
HIGH	2.4756%
LOW	2.2712%
CLOSE	2.3793%

日 経 平 均

OPEN	20400.51
HIGH	22086.88
LOW	20363.28
CLOSE	22011.61

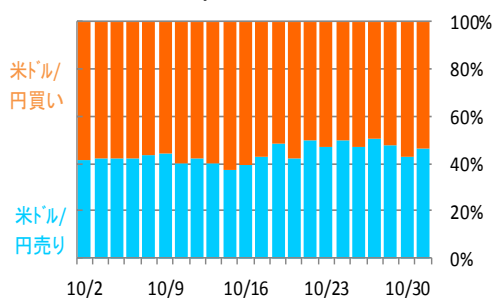
NYダウ平均

OPEN	22423.47
HIGH	23485.25
LOW	22416.00
CLOSE	23377.24

10月のポジション動向

11月の日・米注目イベント

米ドル/円ポジション指数



- ・10月米ADP全国雇用者数(1日)
- ・10月米ISM製造業景況指数(1日)
- ・FOMC政策金利発表(1日)
- ・次期米FRB議長発表(2日)
- ・9月米貿易収支(3日)
- ・10月米雇用統計(3日)
- ・10月米ISM非製造業景況指数(3日)
- ・トランプ米大統領来日(5日)
- ・9月日本経常収支/貿易収支(9日)
- ・日本7-9月期GDP一次速報(15日)
- ・10月米消費者物価指数(15日)
- ・10月米小売売上高(15日)
- ・10月米鉱工業生産(16日)
- ・10月米住宅着工件数(17日)
- ・10月日本貿易収支(20日)
- ・10月米耐久財受注(22日)
- ・FOMC議事録(22日)
- ・7-9月期米GDP・改定値(29日)
- ・10月米PCEデフレーター(30日)

11月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

10月のドル/円相場は小幅に続伸。10月としては7年連続の上昇となった。11月も過去5年連続で上昇しており、6年連続に挑む事になる。例年、この時期にドル高・円安が進む傾向にあるのは、本邦機関投資家らによる外債投資の動きや、国際展開する米企業の利益還流の動きが背景と考えられている。特に後者は、感謝祭休暇(今年は11月23日から)の前に活発化しやすいとされる。もっとも、来年度の米税制改革案に海外保留利益への減税(時限措置)が含まれるため、今年は米企業の利益還流の動きが先送りされる可能性もある。米議会における同法案の審議の行方にも注目しておきたい。また、11月は米連邦公開市場委員会(FOMC、1日)や次期米連邦準備制度理事会(FRB)議長の指名(2日)のほか、米10月雇用統計(3日)など、月初に重要イベントが集中しているのが特徴的だ。その点からも、11月のドル/円相場は、海外勢が感謝祭休暇に入るまでに大勢が決する可能性が高いと考えられる。(神田)

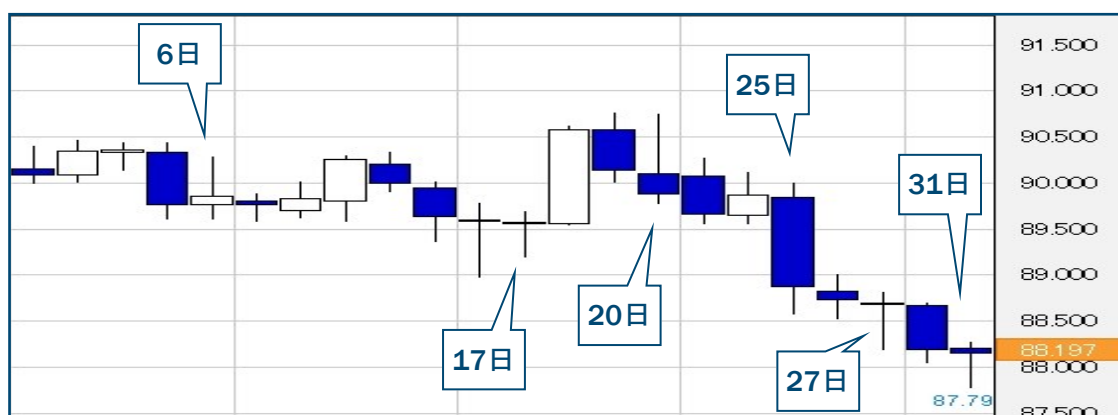
(予想レンジ:112.000-116.000円)

カナダ/円 10月の推移

CAD/JPY

10月のカナダ/円相場は87.790~90.770円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約2.2%の下落(カナダドル安・円高)となった。

前月に加中銀(BOC)のポロズ総裁が追加利上げに慎重な見方を示した事などから、上値重く推移。25日のBOC理事会でも同様の見方が明らかとなり、年内の追加利上げ期待が後退すると共にカナダドル売りが活発化した。そのほか、米次期連邦準備制度理事会(FRB)議長人事でのタカ派議長就任の思惑から一時ドル買いが優勢となった事や、北米自由貿易協定(NAFTA)交渉が難航している事も重しとなり、31日に約2カ月ぶり安値となる87.790円まで一段安となった。



四本値

OPEN	90.154
HIGH	90.770
LOW	87.790
CLOSE	88.161

6日	加9月雇用統計は、失業率6.2%、就業者数1.00万人増とほぼ予想(6.2%、1.20万人増)通りであったが、加9月Ivey購買部景況指数が59.6と予想(56.0)を上回った事もあり、一時90.20円台まで続伸。米9月雇用統計後にドル/円が上昇した事も追い風となった。ただ、その後は北朝鮮がミサイル発射を準備しているとの報道を受けて円高が進行する中で上げ幅を縮小した。
17日	「カナダとメキシコは米国が提示したNAFTA改定案を拒否」との報道が伝わると、一時89.20円前後まで下落。ただ、その後はNYダウ平均が史上初(当時)となる23100ドル台に上昇する中で下げ幅を縮小した。
20日	加8月小売売上高は前月比-0.3%、自動車を除いた売上高も前月比-0.7%と、予想(+0.5%、+0.3%)外の減少となった事を受け、カナダ/円は急落。なお、加9月消費者物価指数は前月比+0.2%、前年比+1.6%と8月(+0.1%、+1.4%)を上回るも、予想(+0.3%、+1.7%)に届かなかった。
25日	BOCは政策金利の据え置き(1.00%)を決定。この事は市場予想通りであったが、声明で「理事会は今後、政策金利の調整に慎重を期する予定」「労働市場には賃金など依然としてたみがある」「インフレ率は2018年後半に2%に上昇する予定。これは、最近の加ドル高のため7月の予想よりもやや遅れている」などが明らかとなった他、ポロズBOC総裁が「BOCはインフレの下振れリスクを懸念している」などと発言した事から、BOCの年内追加利上げ観測が後退すると共にカナダドル売りが強まった。
27日	カナダ/円は一時88.20円前後まで下落するも、52ドル台で伸び悩んでいたNY原油先物が2017年3月以来となる54ドル台を回復する動きを見せる中で下げ幅を縮小した。
31日	加8月国内総生産(GDP)は前月比-0.1%と予想(+0.1%)を下回り、2016年10月以来の減少となった事から、カナダドル売りが優勢となり、9月6日以来の安値となる87.790円まで下落。ただ、その後はトランプ米大統領が、税制改革法案への署名をクリスマスまでに行いたいとの意向を示した事を受けて米国株が上げ幅を拡大した事から、下げ渋った。

加10年債利回り

OPEN	2.091%
HIGH	2.152%
LOW	1.941%
CLOSE	1.951%

N Y 原油

OPEN	51.64
HIGH	54.85
LOW	49.10
CLOSE	54.38

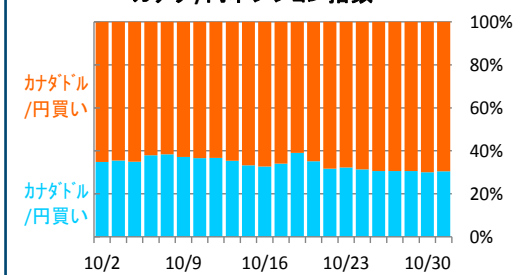
NYダウ平均

OPEN	22423.47
HIGH	23485.25
LOW	22416.00
CLOSE	23377.24

10月のポジション動向

11月のカナダの注目イベント

カナダ/円ポジション指数



- ・9月加貿易収支(3日)
- ・10月加雇用統計(3日)
- ・10月加Ivey購買部景況指数(6日)
- ・10月加住宅着工件数(8日)
- ・9月加新築住宅価格指数(9日)
- ・10月加消費者物価指数(17日)
- ・NAFTA再交渉(第5回、17~21日)
- ・9月加小売売上高(23日)
- ・7-9月期加経常収支(30日)
- ・OPEC総会(30日)

11月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

カナダ中銀(BOC)の利上げ期待が後退している事や、北米自由貿易協定(NAFTA)再交渉が難航している事など、夏以降のカナダドルを取り巻く地合いに変化が見られる。直近のインフレ率は4月以来の高い伸びではあるもののBOCのインフレ目標の中央値(2%)まで距離がある事や、先月のBOC理事会でインフレの先行きに慎重な見方を示している事からも、BOCの利上げ再開は来年にずれ込む見通しだ。金利先物市場から見た利上げ確率も、BOC理事会前日(10月24日)の44%から、31日には24%まで低下している。カナダドル上昇の手がかり材料が少ない中、今月も引き続きカナダドルは上値の重い展開が見込まれる。

テクニカル面では、日足の一目均衡表で三役逆転が点灯しているほか、週足で転換線を明確に割り込んでいる事から、調整局面に入った可能性が高い。週足の一目均衡表の基準線(執筆時86.138円)を割るようならば、雲(同、81.874-83.492円)に向けた一段安もあるだろう。

なお、30日に予定されている石油輸出国機構(OPEC)総会について、現状で需給改善が進んでいる事から減産強化に踏み切る公算は小さい。現在の減産枠が維持されれば原油価格が上昇する可能性があるものの、BOCの利上げ再開が見通せない中ではカナダドル相場への影響は限られる見通しである。(川畑)

(予想レンジ: 83.600-90.400円)